読書日記

今週の筆者は

社会学者
上野千鶴子さん
＊12月10日〜1月13日

「アンダー・コントロール」の怪

戦後生まれで戦争を知らない、戦争ごっこの好きな首相を戴いてしまったおかげで、昨年末、日本でも国家安全保障会議（日本版NSC）とか、特定秘密保護法とか、防衛に関わる新法がつぎつぎに起きた。こんな時期に、防衛費の予算だけは大幅な伸びのようだ。[illegible]の汚染水対策もちっとも「アンダー・コントロール」とはいえないのに、おカネの使い道の優先順位がちがうだろう、と言いたい思い。

同じように火遊びの好きな隣人たちがいるらしい。北朝鮮・中国[illegible]での、あわやという米中艦船のニアミスや、いつでも飛ぶ北朝鮮のミサイル発射、[illegible]んのフライングやわき違いで、一触即発の事態が起きたらどうするのだろう？ こういう危なっかしい隣人たち、中国も北朝鮮も、国民が政府の完全な「アンダー・コントロール」にあるとは見えないが、安倍政権のテリーダー[illegible]に見えてしまうのは、わたしの思い過ごしだろうか？

東アジアで戦火を交えてよいことは何ひとつない。イラクが滅びたあと、「最後のならずもの国家」、北朝鮮に手をやいている周辺諸国にとっても、武力衝突は絶対に避けたい不幸のはずだ。

「安全保障の基本は、人と人の安全保障。そのための礎は、なんといっても[illegible]相互理解だ。今年の梓会出版文化賞の受賞社に、子どもの本の出版社、童心社が選ばれた。戦争を防ぐためのアジアの人々の相互理解をめざして、子どもたちへ向けた平和絵本を、日韓中の出版社が3カ国語で共同出版するという企画が早く実現されたからである。

梓会出版文化賞とは出版社の出版活動を顕彰する日本で唯一の賞。出版社が創設して、すでに30年にわたって続いている。その審査委員を務めているおかげで、ふだん接することの少ない分野の書物にお[illegible]シリーズになっていく[illegible]く。和歌山静子さんの「くつがいく」は、[illegible]士たちの軍靴の[illegible]、なにやらきなくさい今日この頃を予見していたような[illegible]

[illegible]リーズにはほかにも[illegible]った。そのひとつがアーサー・ビナードさんの「さがしています」。ヒロシマ平和記念資料館の所有する、その持ち主を「探しています」という遺品の日常の生活がつづく。死者たちは、その日にはたしかに生きていたんだと伝わってくる。この本は、[illegible]絵本の国、[illegible]田畑精一さんの「さくら」は、小学1年生[illegible]の「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」が、今なお戦争のシンボルだ。[illegible]

＝東京都三鷹市の山本有三記念館で、[illegible]撮影

■さがしています（アーサー・ビナード著、2012年）童心社
■くつがいく（和歌山静子著、2013年）童心社
■さくら（田畑精一著、2013年）童心社

うえの・ちづこ　東京大名誉教授、認定NPO法人「ウィメンズアクションネットワーク」理事長。「おひとりさまの老後」など著書多数。

筆者は上野千鶴子、湯浅誠、西加奈子、沼野充義の4氏です。